

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：17301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25570008

研究課題名(和文)戦争記憶の表象における社会的マイノリティの位置 長崎をフィールドとして

研究課題名(英文)The positionality of minorities in the representation of memories of war: Nagasaki as a field

研究代表者

佐久間 正 (SAKUMA, Tadashi)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：80128181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は第二次世界大戦の記憶に焦点を当て、それが長崎において、公的な歴史叙述ではなく、社会の周縁部においてどのように表象され、共有されているかを明らかにすることを課題としている。主として軍艦島の記憶、原爆被災の記憶、神ノ島の記憶において第二次世界大戦期がどのように位置づけられているかを取り扱う。方法としてはメディアテキストの分析とフィールドワークを組み合わせる。主たるフィールドは長崎に設定するが、比較対照のために満州の記憶も取り上げる。これによって、長崎をフィールドとした記憶研究が、東アジアの近現代史の捉え直しに資することを示す。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the memories of the WWII and figures out how they are represented and shared not in the official historiography, but in the marginal part of society. The meaning of WWII in the memories of Hashima / Battleship-Island, those of the atomic bomb attack, and those of Kami-no-shima is mainly dealt. As the method we combine the media-text-analysis with fieldwork. The main field is Nagasaki, but the memories of Manchuria are compared to those of Nagasaki. Through this comparison this study shows that memory studies on Nagasaki contributes to the reinterpretation of the modern history in East Asia.

研究分野：日本思想史

キーワード：記憶 戦争 地域

## 1. 研究開始当初の背景

原爆被災に関する記憶はこれまでも収集されてきたが、社会的な属性と位置ゆえに経験の担い手として十分に認識されておらず、原爆記憶の語りにおけるマイノリティとして位置づけられてきた主体は少なくない。さらに、長崎では原爆被災以外の戦争記憶が周縁化される傾向が強く見られる。第二次世界大戦が終了して70年近くが経過した今日、周縁化された声を公共的な場において聞き届けることは喫緊の社会的課題である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、長崎市(以下:長崎)をフィールドとして、従来の戦争記憶に関する報道や歴史記述において経験の主体として十分に焦点化されていない人びとの社会的属性と位置を明らかにし、その記憶を戦争記憶表象のネットワークに接続し、それを元に地域近代史の書き換えの方法を提案することである。さらに、長崎をフィールドとした成果を、満州の記憶、朝鮮半島の記憶と結びつけることで、東アジア諸国の正史とは異なる別様の記憶を社会的に共有する可能性を探る。

## 3. 研究の方法

本研究の端緒は、長崎の近代史を「共生」という観点から研究する中で、「他者の記憶」との「共生」の重要性を認識したことにある。それゆえ、まずは長崎の戦争記憶に関する従来の新聞報道と先行研究を、「他者の記憶」という観点から再検討し、メディアと研究者が選択/排除してきた記憶の主体の在処を明らかにし、彼らの記憶を調査するための枠組みを構築する。特に焦点化するのは原爆被災、軍艦島、神ノ島に関する記憶である。平成26年度以降は、長崎市の「正史」である『長崎市市史』(1924-1938, 2012~)とは異なる記憶表象を試みている資料館や継承活動への参与観察と「正史」にはほとんど記述されない地理的周縁部における戦争記憶の聞き取りを行う。特に長野県における満蒙開拓団記念館の活動との比較に重点を置く。調査結果については月例研究会において検討を加える。平成27年度後半に、国際シンポジウムを開催し、本研究の調査結果とそれに基づいて提示する方法モデルが、東アジアの近代史記述に、さらには東アジアにおける記憶の共有にもたらす学術的貢献について広く議論する。

## 4. 研究成果

原爆被災の記憶に関しては、戦後の長崎のローカルメディアにおける原爆関連記事データベースを作成することが主要作業とな

った。ただし、当初想定していたよりも記事の件数のはるかに多かったため、現在も作業を継続中である。

神ノ島に関する調査は、カトリック信仰に関する専門家の協力を得ることが必須であることが明らかとなり、韓国海洋大学の阪野祐介の協力を得て調査を行った。その成果は「長崎・神ノ島における教会と砲台の風景と記憶」というタイトルで報告がなされ、申請者代表者が編者を務める近刊書にも収録される。

軍艦島に関しては、全国紙の記事と長崎新聞の記事をデータベース化し、数量的分析と質的分析を行った。その結果以下の結論を得た。

端島/軍艦島が有する多様な側面は、互いに因果の糸で結ばれているにもかかわらず、個々の主体にとっては、ひとつの側面のみが前景化した形で立ち現れる。新聞記事もまたこの傾向を反映している。少なくともこの島に関するメディア表象はそのような言説配置を行っている。新聞メディアは、ほとんどの場合、ふたつの側面を別個の記事へと分離し、ひとつの記事の中で言及する場合には論理の希薄な並列の関係に置くことによって、両者を結ぶ因果の糸を不可視化しているのである。

端島/軍艦島について報じる新聞記事は、この島の持つ諸側面を「これとあれ」という形で名付け、ヘテロトピアの諸局面を分離ないし並置することによって、この島の「不安を与えずにおかない」性質を不可視のものとしてきた。しかし、先に触れた元朝鮮系労働者、崔の言葉にあるように、日本と東アジアの近代化の光と影が調停不可能な形で集約されたヘテロトピアとして捉えるときに初めて、この島は「顕著で普遍的な意義」を有する世界遺産たりうる。

長崎の記憶と満州の記憶の比較については、以下の知見を得た

近代の国民国家は常意、「よき国民」の創造を試みている。その「よき国民」像は決して一定不変ではなく、時代の要請に応じて変化しうる。満州からの帰国者は、このような「よき日本国民」の創造過程において排除され、社会的排除の弁証法の悪循環に陥れられたことによって生まれた。こうした社会的排除の弁証法によって、中国帰国者の境界線が固定化されている。その起点となったのは、戦後の国民包摂作業である。戦後の日本はそれまでの「混合民族論」ではなく、「単一民族論」を採用するようになった。ここで旧満州に在留した日本人は、日本人でありながら「異質な要素」を携えた存在として排除されたのである。それが歴史的に累積されているのが現状である。

原爆被災の記憶、軍艦島の記憶は近代日本の光と影を映し出している。これは満州の記憶、とりわけ帰国者たちが現在想起する満州の記憶においてもあてはまる。日本と東アジ

アの近代化の光と影が調停不可能な形で集約されたものとして捉えるときに、近代長崎に関する記憶研究は、東アジアの近代史の捉え直し、すなわち、正史に現れない「小さな歴史」の前景化に資するものとなるのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

南誠:「中国帰国者と多文化共生:アンケート調査の結果を手がかりに考える」、『21世紀アジア社会学』(日中社会学会)第7号、pp.72-83、2015年。査読有。

南誠:「中国帰国者の境界文化における国民性の表出」、『日中社会学研究』(日中社会学会)第23巻、pp.45-54、2015年。査読有。

南誠:「残留中国日本人話語:以電視記録片為題材」(中国語)、『新史学8 歴史と記憶』(中華書局)、pp.270-288、2014年。査読有。

南誠:「『満洲』記憶に関する計量的分析の試み:長野県の碑を中心に」、『21世紀東アジア社会学』(日中社会学会)第6号、pp.55-71、2014年。査読有。

Hayanagi Kazunori: “ Japanese Orientalism and the Representation of Nagasaki: Based on the analysis of guidebooks in the modern era ”, *Cultural Interaction Studies of Sea Port Cities*. 11, 59(1), pp.237-268, 2014. 査読無。

才津祐美子、下川達彌、長崎市総務局企画財政部世界遺産推進室事務局:「社会的特性」、『長崎市外海の石積集落景観保存調査報告書』(長崎市) pp.161-202、2013年。査読無。

南誠:「中国『方正日本人公墓』にみる対日意識の形成と表出」、『駒井洋監修 小林真生編『レイシズムと外国人嫌悪』(明石書店) pp.92-102、2013年。査読無。

南誠:「近代日本の移民和中国帰国者」(中国語)、『近代以来亜州移民と海洋社会』(国際学術会議論文集)中山大学東南アジア研究所、pp.229-234、依頼原稿、2013年。査読無。

南誠:「世界遺産と日本の文化遺産」、『21世紀東アジア社会学』第5号、pp.117-130、2013年。査読無。

[学会発表](計15件)

南誠:「中国帰国者の移動とアイデンティティ」、『第5回日韓知識人ワークショップ「解放70年、敗戦70年、戦勝70年のアジア:心の分断と記憶の競争、そして国境を越える市民」』、ハンシン大学(韓国ソウル) 2015年9月6日、招待講演。

葉柳和則:「端島/軍艦島をめぐるメディア言説の持続と変容」、『第5回日韓知識人ワークショップ「解放70年、敗戦70年、戦勝70年のアジア:心の分断と記憶の競争、そして国境を越える市民」』、ハンシン大学(韓国ソウル) 2015年9月6日。

葉柳和則:「旅行ガイドブックの中の長崎イメージ - 『見る価値のあるもの』をめぐる表象の政治」、『第4回日韓知識人ワークショップ「アジアにおける共生(相生)と歴史・記憶の再評価:『事件・人物・場所』を中心に」』、長崎大学(長崎県長崎市) 2015年2月14日。

南誠:「『日本鬼子』イメージの変遷に関する一考察」、『ワークショップ「日本と中国:記憶との共生」』、長崎大学(長崎県長崎市) 2015年1月31日。

葉柳和則:「端島/軍艦島をめぐるメディア言説の内容分析」、『ワークショップ「日本と中国 - 記憶との共生」』、長崎大学(長崎県長崎市) 2015年1月30日。

南誠:「『本国帰還者』とアジア交流圏構想の可能性」、『公開ワークショップ「越境する人と文化から問うアジア:多文化社会の形成にむけて」』、長崎大学(長崎県長崎市) 2014年12月20日。

南誠:満蒙開拓平和記念館・満蒙開拓研究所主催「国境を越えて共に考える旧満洲と満蒙開拓」にてパネリスト、満蒙開拓平和記念館・満蒙開拓研究所主催「国境を越えて共に考える旧満洲と満蒙開拓」、長野県下伊那郡、2014年10月12日、招待講演。

南誠:九州弁護士連合会主催「中国残留帰国者の現在と問題点:尊厳ある共生社会を目指して」にてパネリスト、九州弁護士連合会主催「中国残留帰国者の現在と問題点:尊厳ある共生社会を目指して」、福岡県福岡市、2014年9月13日、招待講演。

Hayanagi Kazunori: “ Japanese Orientalism and the Reception of Nagasaki: Based on the analysis of guide books in the modern era. ”, The 4th International Conference of the World

Committee of Maritime Culture Institutes (WCMCI), Korea Maritime and Ocean University, Pusan (Korea), 25.4.2014,

葉柳和則：「博物館と観光地における表象の政治：長崎のミュージアム展示と記憶の場を事例にして」、国際シンポジウム「東アジアにおける歴史記憶の共生と研究実践」、長野県飯田市、2014年3月8日・9日、招待講演。

南誠：「トランスナショナルな中国帰国者」、国際シンポジウム「北海道における多文化共生：その理念と実践」、北海道大学（北海道札幌市）、2014年3月1日・2日、招待講演。

南誠：「近代日本の移民と中国帰国者」、国際シンポジウム「近代以来亜州移民と海洋社会」、中国中山大学、2013年12月22日、招待講演（中国語）。

葉柳和則：「近代日本の縮図？：端島ノ軍艦島をめぐるメディア言説の内容分析」、国際シンポジウム「東アジアにおけるヒト・モノ・情報・資本の多元的流通—グローバルな社会・文化動態研究に向けた学際的試み」、長崎大学（長崎県長崎市）、2013年12月14日。

増田研：“The Construction of “Native Nagasaki” Mindset: Identifying Local Communities, Practices and Customs”(「長崎地元民」の構築：コンタクトゾーンとしての商業地域における地域アイデンティティと都市祭礼)、長崎大学 東アジア共生プロジェクト国際シンポジウム「東アジアにおけるヒト・モノ・情報・資本の多元的流通—グローバルな社会・文化動態研究に向けた学際的試み (Interdisciplinary Approaches toward the Study of Socio-Cultural Dynamics in East Asia)」, 長崎大学 (長崎県長崎市) 2013年12月14日。

南誠：「中国帰国者の移動体験」、国際シンポジウム「『多文化共生』の新たな展開に向けて：移動する人々から見た日本社会の課題」、青山学院大学(東京都渋谷区)、2013年12月7日、招待講演。

〔図書〕(計5件)

葉柳和則(編)：「長崎：記憶の風景とその表象」、晃洋書房、『東アジア重点研究叢書』第1巻、2016年、近刊決定、(総頁数352頁)。

南誠：『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学』、明石書店、2016年、(総頁数

278頁)。

増田研・梶丸岳・椎野若菜：「フィールドの見方 (FENICS 100万人のフィールドワーカー第2巻)」、古今書院、2015年、総頁数214頁。

南誠：「從“国民”到“移民”：中国帰国者の歴史形成和身分認同」(中国語)、広東出版社、袁丁編『近代以来亜州移民と海洋社会』、2014年、pp107-117(総頁数323頁)。

増田研・石原美奈子(編)：「対立・干渉・無関心：バンナにおける福音主義の布教と共存の幅をめぐる」、風響社、『せめぎあう宗教と国家：エチオピア 神々の相克と共生』、2014年、pp.327-358(総頁数436頁)。

才津祐美子：「日本における文化的景観保護制度の展開と課題」、風響社、『世界遺産時代の民俗学 - グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較 - 』、2013年、pp.277-302(総頁数418頁)。

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

佐久間 正 (SAKUMA, Tadashi)  
長崎大学・多文化社会学部・教授  
研究者番号：80128181

(2) 研究分担者

葉柳 和則 (HAYANAGI, Kazunori)  
長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：70332856

増田 研 (MASUDA, Ken)  
長崎大学・多文化社会学部・准教授  
研究者番号：20311251

才津 祐美子 (SAITSU, Yumiko)  
長崎大学・多文化社会学部・准教授  
研究者番号：40412613

南 誠 (MINAMI, Makoto)  
長崎大学・多文化社会学部・助教  
研究者番号：70614121